

徳大病院で新生前診断へ

妊婦の血液でダウン症など胎児の染色体異常を調べる新しい出生前診断が4月から徳島大学病院

などで行われる見通しとなっている。対象は限られているが、診断の選択肢が増え、胎児の状態を知りたい妊婦には歓迎されそう。一方で、産むかどうかの選択を迫られることにもなりかねず、関係団体、妊婦の中に根強い抵抗や戸惑いがある。

妊婦ら抵抗や戸惑い

徳島市佐古三番ック(徳島市佐古三番町)の鎌田周作院長(59)は「胎児の状態を早く知りたい」と願う人は多い。診断の選択肢が増えることは、妊婦にとって朗報と期待をのぞかせる。安易に診断を受けることによる中絶の増加を懸念する声もあるが「専門家による診断説明やカウンセリングが可能な施設に限定すること」で、安易な流れを食い止められるはずだ」と強調する。

妊娠4カ月の女性(27)は「母親や夫は事前に心の準備ができる。リスクが少なくてほぼ正確な診断を地元で受けられるのは、対象となる妊婦にと

っては幸運だと思う」とにもなりかねない」と指摘する。

県支部の会員はダウン症の子を持つ親ら約70人。「次の子を」と考え

日本ダウン症協会徳島県支部の白石光生支部長(72)は「生まれる前から色分けして子どもの尊厳を損なうとの議論もある。いま生きているダウン症の子を否定すること吐露した。



新しい出生前診断について、思いを語る妊婦＝県内

新診断の対象は、染色体異常の子どもの妊娠した経験がある人や、超音波検査で異常が疑われた妊婦に限られる。流産の危険性が少なく精度も高いことから、条件緩和を求める動きも出そう。その一方で、安易な判断や性急な広がり懸念する声もある。

羊水検査を受けた経験がある30代後半の女性は「出生前診断を受けることは、命を選ぶこと」と言。結果は陰性だったが「診断を受けた自分の判断が正しかったのか今でも分からない」と自問自答し続けている。

妊娠中の女性(28)は「診断前に命についてきちんと考え、陽性だった場合にとどうするか、答えを出してから臨むべきだ」と思。白石支部長は「診断前のカウンセリングはもちろん、中絶、出産を選択した妊婦への精神的ケアなどを病院がどこまでできるかが重要だ」と語った。(尾形つくみ、大塚康代)